

『戦後台湾俳句小史』（五）

第三期（高原期）台北俳句会における 燕巢俳句会との協働と「台湾歳時記」の編纂

磯 田 一 雄

1. はじめに

『台北俳句集』の第18集（1989年3月）から第29集（2002年1月）までを、台北俳句会の第三期（高原期）と呼びたい。この期の台北俳句会の特徴は、各句集の投句者数が60人台と、比較的安定（高止まり）していたことである（59人になったことが3回、70人になったことが一回ある。会員は百人前後いたという¹⁾）。

第三期になると、第一期からの古い会員の中に、逝去して姿を消す人がぼつぼつ現れる。既に黄靈芝の姉の陳候鳥（本名：阿嬌）が第二期末の第17集で故人（遺作）になっているが、戦前期からの俳人・呂鵠城が第22集、邱秀琴が第23集、台北俳句会の事実上の創立者ともいえる呉建堂（孤蓬）が第26集～第28集、范姜房枝（辻野房子）が第27集～第29集、台北川柳会（現・台湾川柳会）の初代会長にもなった頼天河が第28～30集で、それぞれ故人（遺作）になっている。第二期（第9集）からの人では、台北春燈句会で活躍した王酔生が第24・25集で遺作になっている。そのほかにも、入会は遅くとも高齢のため姿を消す人がこの第三期には多くなる。

この第三期で最も重要なことは、台北俳句会がもう一つの日本の俳句結社『燕巢』^{えんそう}（大阪府豊中市）との関わりを、公的に持つようになったことである。第一期以来、台北俳句会の当面した課題は、句作のレベルの向上と並んで、「台湾俳句の独自性を何処に求めるか」、ということであった。第二期以来一部の会員が個人的に『春燈』との関係を持って、句作の向上に努めていたのであるが、それによって、黄靈芝の気にして

いた俳句のレベルは、確かに一部では向上したかもしれない。しかし全体として見れば、台湾的な句より日本的な句に惹かれて行ったのも確かであろう。『春燈』への投句には台湾的な色彩はあまり感じられない²⁾。

それに対して俳句における台湾色の問題に、句会全体で真っ向から取り組むことになったのが、第三期に始まった燕巢俳句会との関わりであった。台湾色を出すには、台湾独自の風物を詠み込むことであるが、なかんずく「台湾季語」を制定し、それを集約して「台湾歳時記」を編纂することがもっとも確実な手法である。これが図らずも、燕巢俳句会との協力によって行われることとなったのである。しかもその成果はやがて『台湾俳句歳時記』（言叢社、2003年4月）を刊行することになり、一躍台湾俳句の存在を日本の俳句界に知らしめることになったのである。その意味で台湾俳句を完成したのは、台北俳句会と燕巢との協働作業であったといえよう。またそれは創立以来20年近くの間、黄靈芝をはじめとする会員の俳句力の向上があって可能になったのだとも言えるであろう。

『台湾俳句歳時記』は、台湾俳句界の永年にわたる大問題に正面から応えた画期的な業績である。全部で396の台湾季語を制定し、各8句ずつの例句と336字分の解説をつけて編集したもので、言語的にも台湾語（閩南語）が220季題と過半数を占め、日本語が161季題、客家語が2季題、中国語（北京語）が13季題と多岐に渡っている。その基礎となったのが、『燕巢』に1989年12月号から1998年9月号まで、連載された「台湾歳時記」である。これは台湾季語の解説と例句を毎号4季題ずつ（時に2季題。最初期は1～3季題）例句と解説文を付けて構成したものであり、連載終了後さらに4年余りかけて補充・整理が行われた上で、『台湾俳句歳時記』として刊行されている。台北俳句集でいえば、第18集刊行直後に始まり、第29集刊行後1年余りを経た時期までに当る。その間には紆余曲折もあり、台北俳句会の第三期（高原期）全期にわたって生み出された所業であった。

繰返すが実際、台北俳句会の活動——というより、戦後台湾における俳句活動——は、この『台湾俳句歳時記』によって初めて日本でも知られるようになったといって過言ではない。2001年4月大岡信の『折々のうた』の連載で二回に渡り『黄靈芝作品集 15』（1990年）に掲載された俳句が短歌と一緒に紹介されているが、これは20回に渡る『台湾

万葉集』の紹介の時のような反響は呼ばなかった。台北俳句会の句——戦後台湾の俳句——は本来『台北俳句集』によって知られるべきであったろうが、台湾発行の私家版であるから日本ではほとんど知られることがなかった。そこで一般には、日本で刊行されたこの『台湾俳句歳時記』が、台湾俳句を知る上で事実上唯一のチャンネルになっている。しかもこの書は極めてユニークである。それは「台湾季語」を通じて、黄靈芝がこれまで提起してきた台湾俳句のアイデンティティを確認する手立てを確立しているためである³⁾。

更に台北俳句会の第二期（発展期）においては、会員の句に影響があったのは、黄靈芝の特異な句よりも、むしろ『春燈』との関わりであったと思われるのに対し、第三期（高原期）において会員の句作に影響したのは、月例会での台湾季語の使用だったのではなからうか。この「台湾歳時記」の連載を続けている間、台北俳句会では毎月特定の台湾季語で会員に句作してもらい、その中から選句して『燕巢』に送っていた。この共同作業が、台北俳句会会員の句作にも大きな影響があったろうことは疑いない。『春燈』との関係は第三期になっても依然続いてはいたが、もともと一部の熱心な会員に限られていたのに対し、こちらは基本的に会員全員に関係があり、季語によって表現も規制されるのであるから、句作への影響は遥かに大きかったといえよう。この影響は当然の結果として台北俳句集に現れる。実は台湾季語句そのものは、第一期からずっと見られたのであるが、その数は限られていた。それが『燕巢』での「台湾歳時記」連載開始後最初に刊行された第19集からその数が上昇に転じ、第20集以後はこれが激増して、多くの会員の句に台湾季語が詠み込まれるようになるのである。

このように、台北俳句会の第三期に入ると、一見地味に見える戦後台湾の俳句史が、実は一期毎に大きなドラマに満ちていたことが次第に見えてくるのである。

2. 台北俳句会と『燕巢』との関わりの経緯

2- (1) 1989年の交流開始以前の、『燕巢』の台湾との関わり

台北俳句会と『燕巢』との関係は、『春燈』の場合とは正反対に、ま

ず主宰同士の関係から始まった。燕巢俳句会の主宰羽田岳水（本名、岡造。1918-2011）は山梨県山中湖村の生れで、俳号は出身地に因む。兄が台湾総督府の官吏だった関係で渡台して、台中師範学校を卒業後、台湾人女子の初等学校である台中市幸公学校ざいこうの教師となった。校長の町田富重（俳号・松里しょうり）が俳句を好み月一度教員の俳句会を開いており、先輩の千代田葛彦（本名、次郎）の勧めで岳水もこれに参加した。羽田は1941年に帰国後、水原秋桜子の『馬酔木』に入り、戦後は僚誌『燕巢』（1956年）創立からのメンバーとなり、1986年主宰となった。羽田は「台湾歳時記」を是非編みたいと念願していた⁴⁾。

このように燕巢俳句会主宰の羽田は、台北俳句会と関わりを持つ以前から台湾との縁が深かった。羽田の台中師範時代の学友に施耕冬（本名、香涛、台中の人）がいた。施は1937年（24歳）から俳句を始めたが、戦後頓挫してしまっていたところ、偶然なきっかけから学友の羽田岳水に勧められて1983年から『燕巢』に投句するようになり、1988年燕巢俳句会同人になっている。台北俳句会には参加していなかったが、1987年10月2日～10日に岳水が、台中の教え子たちの還暦記念同窓会に招かれて台湾を訪れた際、施耕冬が羽田に黄靈芝を紹介することによって、燕巢俳句会と台北俳句会との交流が始まったのである。羽田はこの時黄靈芝から直近の『台北俳句集』を何冊か贈られたのであろう。『台北俳句集 13』（1984年）の「あとがき」（原文は無題）を、帰国後発行した『燕巢』1987年11月号に、黄靈芝「季語について」と題して掲載した上、同号の「あとがき」にこう書いている。

……学友だった施耕冬氏の紹介で、台湾文化財の研究に携わる台北の黄靈芝氏にお会いしたことは、格別意義のあるものになった。氏は俳句も嗜まれ、この方にも深い見識をもっていられるのに共鳴しあうことが出来た。本号に載せた「俳句について」の一文は兩三年前のものであるが、真摯に取り組んでおられることが窺えて意を強くした次第である。氏とはこれからも親しく誼を結んで行けるので有難いとおもっている⁵⁾（下線引用者）。

これが黄靈芝のその後度重なる『燕巢』への寄稿の嚆矢となった。これから台北俳句会と燕巢俳句会との句会同士の交流が始まるのだが、

「氏は俳句も嗜まれ」とあるように、岳水は台北俳句会会長の黄靈芝を、この段階ではまだ一台湾俳人扱いで、句会の主宰同士の対等の関係とは見ていない。岳水は燕巢俳句会の主宰に就任して間もない頃で、翌1988年の『燕巢』新年号が「主宰就任披露祝賀記念号」になっており、まさに意気軒昂な頃であった。台湾との繋がりを『燕巢』の一つの「目玉」にしたかったのではなかろうか⁶⁾。岳水は黄靈芝の有能さを見込んで仲間に引き入れようとしたのだが、独立精神の強い黄靈芝は、誘いに応じたように見えて、岳水の思い通りに動こうとはしない面がやがて出てくる。

実はこの羽田らの1987年の訪台は、『燕巢』1989年9月号の「あとがき」に「一昨年の台湾燕巢会づくり主宰一行の旅行も名月を阿里山頂で迎えている」とあるように、「台湾燕巢会づくり」が目的だった。事実『燕巢』1988年4月号から各地域句会の一つとして「台湾燕巢句会」が載るようになり、施耕冬が指導者とされている。場所は台中、メンバーは7人ほどで、台北俳句会の会員や日本人はいない。こうした点で台湾燕巢会は、日本の俳人加藤山椒魚が創設した台北春燈句会とは対照的だった。羽田一行が再び訪台する1989年9月前後になると、台湾燕巢会の人数が増え日本人も参加するようになり、『燕巢』の一般投句欄（燕巢集）にも台湾からの投句が日本人を含めてかなり多くなっている。羽田の狙いはかなり実現しつつあったといえよう。

2- (2) 賛助出詠——交流の象徴

台北俳句会と『燕巢』との関わりを象徴するのは、第18集（1989年8月）以後、主宰・羽田岳水の句が「賛助出詠」として、台北俳句集の冒頭をほぼ毎回飾るようになったことである。この「賛助出詠」は第三期以降の台北俳句集の特色となった。もっとも最初の、第18集の「賛助出詠」の句は、「遍路行」の題で「南無遍照未明の霜に杖つきて」に始まり、20句とも遍路という日本独自の習俗を詠んだ句であるから、やや場違いな感を受けるが、黄靈芝は第18集の「あとがき」の末尾で、岳水の出詠を「記して感謝とし、また喜びとしたい。両地の交流により芽生えるもののあらんことを願われてのことである」と書いている（この黄靈芝の書き方は「この交流は燕巢の方が望んだのであって、こちらから持ちかけたわけではない」と言いたいかのようでもある。また岳水

は『燕巢』に台湾的なものを入れることを望んではいたが、その一方で台北俳句会に日本的なものを持ち込もうとしていたようにも思われる)。岳水は第19集には無題で、第20集には「台湾雑唱」の題で、どちらも台湾詠の句を出詠している。第21集には賛助出詠がなく、第22集からは、なると俳句会主宰の福島せいぎ（本名・誠浄）も出詠するようになった。以後二人とも主に日本詠句を、時に台湾詠句を出詠している⁷⁾。

台北春燈句会の句は一部台湾的な句もあるが、大部分は日本趣味の句であった。主宰の加藤山椒魚も時には台湾的な句も詠んでいたけれども、所詮一會員の投句に過ぎず、『春燈』の大勢には関わりなかった。これに対して、燕巢俳句会の場合は、主宰の羽田岳水自ら進んで『燕巢』に台湾的なものを盛り込もうとした点に特色がある。その典型が「台湾歳時記」の連載の企画である。また台北俳句会と『燕巢』との関係は、さらに第三期における台北俳句集の黄靈芝筆の「あとがき」のあり方や内容にまで影響している。まず『燕巢』との関わりを「台湾歳時記」の編纂を中心に先に述べて、句集の「あとがき」や、黄靈芝を含む掲載句についてはその後で取り上げることにしよう。

2 - (3) 「台湾歳時記」の連載から『台湾俳句歳時記』の刊行へ ——解説文と例句の変化——

賛助出詠のような象徴的な行為を越えた実質的な関わりとして、きわめて重要なのは、台北俳句会と燕巢俳句会との協力関係・共同作業により、「台湾歳時記」の連載という形で台湾季語の編纂が始まったことである。既述のように、これを基盤として黄靈芝著『台湾俳句歳時記』（東京・言叢社、2003年4月）が刊行されるという、国際間協働ともいえる画期的な作業が行われたのである（ただし後述するように、そこにはいくつもの問題があったのも事実である）。

1989年9月12日～18日、羽田は「燕巢400号・35周年記念 台湾俳句旅行」と称して、燕巢俳句会員をひきつれ、33名で再び台湾を訪れた。台中では「現地俳句会」（台湾燕巢会）と交歓会、帰国前日の9月17日には羽田岳水夫妻以下燕巢俳句会の有志8名と、黄靈芝・頼天河・陳錫恭・王醉生・杜文祥など15名の台北俳句会の有志が、台北市内で交歓会を行った。羽田はこう述べている⁸⁾。

（九月）十七日午後私はじめ燕巢八名は、台北俳句会の黄靈芝氏

以下十五名が待つ王子屋で歓迎を受け懇談した。……この交流は黄氏の俳句情熱に発する私どもとの交流に、和やかな内にも真剣に話しあわれて、裨益するものが多かった。これは兼ねてより私の念願していた、俳句による国境を超えた文学交流により、双方の友情と信頼を一層深め、両国の紐帯をいよいよ堅くすることを俳句面から進めていくことになったのである。台北句会の方々の中には、日本の他誌に拠る方も居られるが、それを超越して台湾俳壇の興隆を図り、私どもの南国俳句への志向に視野を拡げて行ける幸先のよい出発となったのだった。これが燕巢の企画している台湾歳時記作成など具体的な作業に、台北句会の皆様始め、多くの台湾識者の支援によって達成出来るよう、念願する次第である。(下線引用者)

「日本の他誌」とは『春燈』のことであろう。台北俳句会の中には春燈に熱心に参加している会員がおり、既に台北春燈句会もあるのに、さらに台湾燕巢会を台北にまで広げようというのである。また「台湾歳時記」については、その後さらに一歩進んで「兼てから岳水先生が抱負にされていた《台湾歳時記》を作るということについて、この際台北俳句会の皆さんと、私たち燕巢が協力しあっていくということが採択された」ことになっている⁹⁾。

これについて黄靈芝は後に次のように述べている¹⁰⁾。

台中の長者・施香涛翁(俳号：耕冬)のご紹介で『燕巢』の方々を台北にお迎えしたのは、1989年の多分、晩夏初秋の頃だった。歓宴の席上で羽田岳水主宰は戦前に台湾の中部にあって教鞭をとっておられたことに言及され、その関係もあって『台湾歳時記』をぜひとも編みたい旨のご希望とその協力を私に求められた。(中略)

その実、『台湾歳時記』については何時か書かねばならない義務のようなものを、私は随分と以前から心のどこかに端折っていた。戦前の日本領時代から受けついで文芸の一ジャンルとしての俳句—日本語であれ中国文であれ—の文芸的または文化的意味合いを肯定するためにも、または二十数年にわたった、かなり困難な運営による台北俳句会およびそこで励んで来られた幾多の俳句詩人たちへの

責任からも、いずれは書かねばならない一本ではあった（下線引用者）。

黄靈芝は既に『台北俳句集』第9集（1980年）で日本趣味追隨を批判し、俳句の「台湾化」につながる主張をしているが、これは「台湾人が日本語で俳句を詠む必然性」つまり俳句における台湾的アイデンティティの問題にほかならない。伝統俳句は季節感、したがって季語を重視するが、その適用において日本と台湾とではかなり隔たりが生ずる。独自の季節感のある台湾では、当然「台湾季語」があるべきだということ、戦前の日本統治期から既に多くの日本俳人の間で問題になっていたが、実際には明治期の小林里平『台湾歳時記』（1910年）にしても例句が少なく、本格的な俳句歳時記とはいえなかった¹¹⁾。

戦前台中で俳誌『竹鷄』¹²⁾の主宰だった阿川燕城（本名昔。1903年東京生れ、没年不明）は、この頃『燕巢』に寄稿した「台湾の季感」で、この問題を以下のように論じている。小林の『台湾歳時記』にも言及しているが、例句の乏しかったことには触れていない¹³⁾。

季感は、その土地がその地の住人に与える季節変化の感じで、個人的なものではない。もし個人的なものなら、歳時記は存在価値は失われる。その土地の季感は、その地に多年住むのでなくては、その真相はつかめない。熱帯にも四季の移りはある、草木鳥獸常に同じではない。……熱帯にも短いながら、秋、冬、春があるので、その微妙な移りを感じ得るところに、熱帯にあつて俳句を作る意義があり、また必要性がある。（中略）

私は（『竹鷄』の同人たちの）協力を得て、内地人に台湾風土を理解してもらうため『台湾歳時記』の編さんを思い立った。しかし戦局の拡大、同人の応召、その他諸般の事情はこれを果たさず、そのうち敗戦、引揚げとなり、すべて一場の夢と消えてしまった。

現在先人の書いた『台湾歳時記』としては、明治四十三年に刊行された小林里平氏著のものがある。……しかしこの書は、台湾の風物、動植物を四季に分類しただけで、台湾の季感を窺うすべもない（括弧内引用者）。

こういうこともあって、羽田岳水は「台湾歳時記」の編纂に並々ならぬ

関心を抱いたのであろう。

だがこの岳水の要請を受けて、黄靈芝は次のような、多くの問題を感じていた。要点のみ紹介する。

(1) まず寿命。病弱な自分に数年はかかる仕事に果たして耐えられるか。(2) 自分にその資格があるか。(3) 月刊誌の『燕巢』のペースについて行けるか。(4) さらに難しい「季の認定」の問題。(5) 「桜」のように一字だけで花まで含まれる季語や「桃の実」「桃の花」のようにしなければならない季語がある。その区分上の根拠は何か。(6) 台湾で特に複雑な地方性の問題、(7) 発音の問題。(8) 台湾語における読みことばと話し言葉との使い分けの問題。(9) カナによる台湾語の表記の困難さ。(10) 士大夫根性(階層によるものの呼び名の違い)。(11) 日本趣味と台湾趣味との差。(12) この歳時記は著者のために書くのか読者のために書くのか¹⁴⁾。

このように黄靈芝の悩みの種は尽きなかったが、ともかく次のような取り決めが岳水との間で行われたのである¹⁵⁾。

- ① 月に四題。
- ② 各題とも(解説)本文329字とし、例句を8句収める(各題とも例句を30句ほど集め、うち4句を黄靈芝が選び、残りの句の中から羽田が4句選ぶ)。
- ③ 校正は黄靈芝が行う。

3 「台湾歳時記」の編纂過程

3- (1) 「台湾歳時記」と『台湾俳句歳時記』

台北俳句会会長の黄靈芝は、燕巢主宰の羽田岳水の熱心な慫慂により、この大事業に台北俳句会会員とともに参加することになったのであるが、そこには様々な問題が横たわっていた。

最初に断っておきたいのは、『台湾俳句歳時記』は、『燕巢』に連載された「台湾歳時記」がそのままとめられて刊行されたのではない、ということである。1998年9月の連載終了後さらに4年余りかけて、黄

靈芝が補充・修正して全 396 題とし、代表的な台湾季語の写真をも添えて、2003 年 4 月に刊行されたのである。そもそも連載時のタイトルは「台湾歳時記」で、連載された季題は全部で 379 題（うち 1 題は杜文祥によるもの）であり、内容的にも連載と刊行された『台湾俳句歳時記』とではかなりの差がある。以下なるべく両者を対比しながら見て行きたい。

まずどんな項目が台湾季語とされたのか。「台湾歳時記」は内情として次の三つの区分を持つが、これらのうち①と②に限定すると黄靈芝はいう¹⁶⁾。

- ① 台湾独特の季題。たとえば土地公生、鱧魚、野苧菜…
- ② 名称は同じか似ていても内情の異なるもの。たとえば「神の留守」（台湾での神の留守は陰暦 12 月 24 日から翌正月 4 日までの 10 日間に限る）。あるいは鱒（鱒は台湾での経済海産食用魚の首）。
- ③ 日本と基本的に変らないもの、例えば大根播く、蚯蚓、アイスクリーム…

実際「台湾歳時記」においても、『台湾俳句歳時記』においても、バナナ・パイナップル・七夕・端午など季題としては日本の歳時記にも掲載されているようなものが少なくない。しかし解説を読めば、その台湾的な特殊性や背景が理解できるようになっている。また「台湾歳時記」の「神の留守」は『台湾俳句歳時記』では「神迎」になっているというような違いがある。

『燕巢』1989 年 12 月号から 1990 年 10 月号に掲載された、最初の 10 季題を例に、「台湾歳時記」と『台湾俳句歳時記』における季題の扱いの異同点を見てみよう。

分類	正題季語	副題季語（別の言い方）
—	(1) サシバ	灰面鶯・灰面鶯鷹・灰面秃鶯・印度鶯・刺羽・鵝鳩・青鷹
新年…時候	(2) 新正	新正月・新年
新年…植物	靈芝	芝・芝草・石耳・寿潜・希夷・まんねんだけ・ひじりだけ・まごしゃくし

冬 …生活	<small>ポータン</small> 補冬	菓喰・菓獸
新春…時候	(3) <small>きゅうしやうがつ</small> 旧正月	新春・初春・年初・元旦／春聯・爆竹・ <small>ティークエ ツァイタウクエ</small> 甜 糰・菜頭糰
春 …植物	(4) <small>こちやうらん</small> 胡蝶蘭	胡蝶蘭・ファレノプシス／台湾胡蝶蘭・ アマビリス・シレリアナ・ルデマニアア ナ・ヴィオラセア・ギガンティア
春 …植物	<small>しょうわそう</small> 昭和草	<small>シンセンツァイ ヤーボンニイ</small> 神仙菜・野木耳
春 …行事	(5) <small>まそまつり</small> 媽祖祭	<small>マーツォーシー ギャアマーツォー</small> 媽祖生・迎媽祖
春 …行事	<small>せいめいせつ</small> 清明節	<small>チンビン</small> 清明・墓參・展墓・掃墓節・墓洗ふ／ <small>ボンツァ</small> 墓紙・墓草刈る
春 …動物	(6) ペタコ	シロガシラ・ペエタウコツ
春 …動物	<small>ホエビイ</small> 画眉	<small>ファーメイ ファーメイニャウ ちめどり</small> ホイビイ・画眉・画眉鳥・知目鳥／籠画 眉・籠ちめ鳥

これが『台湾俳句歳時記』では同じ季題が次のようになっている。

分類・季節	正題季語	副題季語
自然動物・涼しい頃	380 さしば	<small>こつ けい どり</small> 国慶鳥・国慶鳥 <small>(中)</small> ・灰面 <small>チウ</small> 鶯 <small>(中)</small> ・差羽・鶯 <small>シンチア リップンチアグエ</small> 新正・日本正月
人事・年末年始	002 新正月	<small>しんしょうがつ</small> 新正月
自然植物・暑い頃	234 靈芝	<small>れいし</small> 靈芝
人事・寒い頃	143 補冬	<small>ポオタン</small> 補冬
人事・年末年始	001 旧正月	<small>きゅうしやうがつ</small> 旧正月
自然植物・暖かい頃	189 胡蝶蘭	<small>こちやうらん</small> 胡蝶蘭
自然植物・暖かい頃	187 昭和草	<small>しょうわそう</small> 昭和草
人事・暖かい頃	038 媽祖祭	<small>まそまつり</small> 媽祖生・迎媽祖
人事・暖かい頃	042 清明	<small>チンビン</small> 清明節・掃墓節・展墓
自然動物・暑い頃	358 ペタコ	<small>ペエタウコツ</small> 白頭拵・しろがしら
自然動物・暖かい頃	322 画眉	<small>ホエビイ</small> 画眉 <small>(中)</small> ・画眉鳥 <small>(中)</small> ・知目 鳥・ホイビイ

まず最も基本的な問題として、季題としては同じでも、「新正」と「新正月」のように見出しとなる正題季語が違うものがある。これは正題季語と副題季語の入れ替わりによる。全体として台湾での用法を重視した構成に変わっている。副題季語も「台湾歳時記」では乱雑な観もあったが、『台湾俳句歳時記』ではかなり整理されている。

次に季節の分類が違っている。連載の「台湾歳時記」では新年・春・夏・秋・冬という日本の俳句歳時記の伝統的な様式に従っていたが、『台湾俳句歳時記』ではこれを人事、自然・天地現象、自然・動物、自然・植物に大きく四分類し、季節も春夏秋冬ではなく、暖かい頃・暑い頃・涼しい頃・寒い頃と分けているのが大きな特徴である。ただし人事はこれに年末年始が加わり、自然・天然現象は特に季節を分けていない。掲載番号は、「台湾歳時記」では『燕巢』での掲載順で、(4)以降は2季題ずつになっていたが、『台湾俳句歳時記』では1季題ずつ配列順に番号を付している。

正題季語と副題季語に相当するものは日本の歳時記にもあるが、「台湾歳時記」では多くの場合、副題季語が上下または左右の二段に分かれていた(例えば、「清明節」の場合、「清明」^{チンミン}から「墓洗ふ」までが上段、「墓紙」^{ボツア}・「墓草刈る」が下段になっていた。しかしこの分け方の基準は、はっきりしないことが多い)。これに対し『台湾俳句歳時記』では、日本の歳時記と同じく、この区分がされていない。さらに細かく言うと、「台湾歳時記」では、読み仮名の付いている漢字語は、日本語読みで現代仮名遣いと旧仮名遣いで違いがあれば、必ず現代がな読みを右側に、旧仮名読みを左に記していた。また台湾語読みはほとんど閩南語読みで、中国語読みは「台湾歳時記」ではわずかだった(上(6)の「画眉」がこれに当たるが、台湾語読みと区別する表示がない)。しかし『台湾俳句歳時記』では、日本語読みを現代仮名遣いのみに行っている。また台湾語だけでなく、中国語読みの季語もかなりあり、読みがなの右下に(中)と注記されている(例えば、正題季語:爆竹、副題季語:初爆竹・放砲・放年砲・鞭砲(中))。

編纂の経過を見ると、連載「台湾歳時記」は最初の頃毎号1ページずつ宛てられていた。1989年12月号の(1)は1季題、(2)のみは半ページで1季題、(3)は3季題だったが、1990年の(4)から2季題ずつと

なった。さらに1991年3月号の(15)・(16)からは、原則として毎月2頁ずつ計4季題となった。執筆者は「(1) サシバ」(1989年12月号)のみ台北俳句会員で、羽田岳水の友人でもあった杜文祥が執筆したが、(2)以降はすべて黄靈芝の筆による。「(1) サシバ」は、解説文960字に例句7句。(2)の「新年・靈芝・補冬」の3季題は、解説文各300字、例句4句。(3)「旧正月」は解説文420字、例句5句。解説文の長さとは例句数が基本的に定まるのは1990年3月号の(4)以降で、既述のように、各季題とも解説文330字(この文字枠を黄靈芝はすべて329字と末尾を几帳面に一字空けて書いている)、例句8句ずつとなり、このスタイルが『台湾俳句歳時記』でも踏襲されている¹⁷⁾。

最も基本的な問題は、このように「台湾歳時記」の内容が、そのまま『台湾俳句歳時記』に引き継がれたのではないということである。特に連載第一回の「サシバ」は、『台湾俳句歳時記』では「さしば」となり、杜文祥による解説文は黄靈芝によって完全に書き換えられ、例句も後述のように全句入れ替えられている。長くなるので解説文の比較は省略するが、黄靈芝による文の方が内容といい長さといい、俳句歳時記の目的に即してはるかに優れているとだけ指摘しておく。

次に主題季語や副題季語が変わった場合があることがわかる(以下「」が正題季語、()が副題季語。日本語読みの旧仮名表記と現代仮名表記の両方のルビのある場合は、現代仮名表記のみを示す)。連載(2)の「しんせい 新正しんしょうがつ」(新正月・新年)を見ると、『台湾俳句歳時記』では「しんしょうがつ 新正が月シンチア」(新正・日本正月)と変っている。これと対をなす(3)「きゅうせい 旧正月」は正題季語は同じだが、副題季語は前者が(新春・初春・年初・元旦／テイクエ ツアイトクエ 春聯・爆竹・甜粿・菜頭粿)と二行にわけて記されていたのに対し、後者では(旧正・正月・旧正・新春・新年)と一行で記されている。さらに掲載順は「旧正月」のほうが「新正月」の前、「年末年始」のトップになっており、「新春・新年」が「旧正月」の副題季語になっている。これは台湾の新年の祝い方の実態に合わせた変更である。このいわば「台湾ファースト」の姿勢が『台湾俳句歳時記』では到る所に見られる。正題季語と副題季語が入れ替わった季題は他にもあるが、後で追加された季題もあり、特に副題季語は違いが大きい¹⁸⁾。

阿部誠文は『燕巢』連載の「台湾歳時記」の季題について次のように述べている¹⁹⁾。

黄靈芝の「台湾歳時記」に収められた季題は、台湾特有のもの、台湾と日本と共通のもの、日本にもあるが、台湾にあって日本と違うものに分類できる。台湾特有のものは、新たな知識が得られるとともに、従来の日本人の誤りが正される。台湾と共通のものについては親和の情が湧くとともに句作にも、大きな問題はないかもしれない。もっとも問題なのは、日本にあって、日本と違うものである。日本と同じものであれば、その先入観から、たとえ違っていても日本と同じものという誤解を招く。これが、日本人にとっての落とし穴になる。これを、よく埋めてくれている。それに、それとなく示されている日台関係史、日本では、あまり知られていないこと、なかんづく、台湾の人々の思いが伝わってくる。これは、日本人がもっともっと考えなくてはならないことであろう。(中略)

取りあげれば、きりがないほど、黄靈芝の「台湾歳時記」は、台湾の文化、民俗、自然の宝庫であり、読んでまた面白い。台湾特有の季題が多く採録されており、台湾のよろしさが伝えられている。日本人には未知の季題も少なくないが、百聞は一見に如かず。ぜひ台湾に行って、見、体験し、確かめ、台湾への理解を深め、秀句を作って、台湾の季題を日本にも広めていただきたいものだ。それが、相互理解、国際交流につながることを願って。

次に解説文をみよう。同じ季題でも「台湾歳時記」の時と『台湾俳句歳時記』とでは、時にかかなりのちがいがあ、る、「サシバ」のように、総字数が変り、執筆者が変った解説文が大幅に変更されるのは当然だが、その他の項目の解説文も、すべて黄靈芝によるものでありながら、『燕巢』連載時と『台湾俳句歳時記』とで、大いに変わったものとほとんど変わらないもの、あるいは共通性の多いものがあり、個々の季語ごとに見ていく必要がある。そもそも黄靈芝にとって問題だったのは、各季題の解説文であった。「単なる解説書ではなく、329字が一篇の作品であるような、夢であってもよい、だが私にしか書けない洒脱な歳時記こそが目標」であった。「台湾歳時記」の解説文を見てみよう。連載初期の「台湾歳時記(4)」の「春…植物・昭和草しょうわそう(副題季語：神仙菜シンセンツァイ・野木耳ヤキミミ)を例にする。

田畑や路傍に生える菊科の一年生雑草。春菊に似た香りがあり、食用として美味である。戦時中に出版された『台湾野生食用植物図譜』の表紙に用いられているが、この本によると昭和四年頃、日月潭発電所附近に群生が見られ、十三年頃に台東と花蓮、そして台北平野に入ったのは昭和十四年頃だという（島田弥市技師）。今は全島の低海拔地に分布する。繁殖が早いので戦時中に日本軍が飛行機で種子を播いたのだという噂も立った。つぼんだ形の花冠は赤煉瓦色を呈し、花後大きく開いて球状の絮となる。台湾にはタンポポが少なく、絮が目立つのは昭和草が第一であろう。昭和は良いにつけ悪いにつけ台湾人にも記憶から拭いがたい一代だったが、日本の置き土産のような何かを感じられる名の草である。帰化植物。

この後例句が8句続くが省略する。この季題は『台湾俳句歳時記』では解説の大意はそのままで、中間部を簡略化して、末尾をこう結んでいる。「面白いことに飽食の今日、健康食品として大型のスーパーマーケットでこれを売っている。豚はもう食べないらしい」。黄靈芝一流の皮肉の利いたユーモアである。黄靈芝の文体の特徴を知るためにもう一例、別の解説文——台湾歳時記（189）夏…動物「密婆 ^{ビッポオ} 副題季語：蝙蝠 ^{ベン}・かうもり・かはほり・蚊喰鳥」——を（一部省略して）挙げる。

クタバッテシマヘ！という言葉から二葉亭四迷が生まれたそうな。中国では蝙蝠の蝠が福と同音のため吉祥とされ、図案に多用された。明代頃からの風らしい。諧音双関語は文人がにやりと笑って横流した遊び心にもよったが、吉祥を願っての真摯もありげ。（中略）魏の曹蜀には「吁 ^{あいや} 何 ^{なん} 姦氣 ^{たるのかんき}…形殊性詭、毎変常式」の詩があり、台湾語の密婆ともども魔法使いのお婆を連想させる。折角見える昼には寝て、とうとう見えなくなった夜に至り飛翔するとは、やっぱり魔法使いのお婆に違いないなあ。目がないのに鉄塔にもぶつからないといい、でもそういった先生が怕がっているよ。糞を集めて洗うと蚊の目玉が100万粒ほど獲れ、何とまあ、解熱剤として古今無双。

こちらは『台湾俳句歳時記』では末尾の「解熱剤」が「眼薬」に替わっている以外、文の変更はない。これらの例でも分るように、この解説文は軽妙で秀逸だった。阿部誠文は、「黄靈芝の文体は、あるときは真面目に、あるときは語るように、あるときは茶化して、あるときは、笑い、無視するというように、抑揚があり、リズムがある。」と称賛している²⁰。

いっぽうこの企画に着手してから刊行まで14年近く経っているから、その間の社会的変化を反映していると思われるような項目もある。例えば1991年12月号に「秋・行事」として連載された、「(32) 光復節・豊年祭、(33) 孔子祭・重九節」の4項目を見ると、『台湾俳句歳時記』の「光復節」は解説文が微妙に変化しており、例句も8句のうち2句が入れ替えられている。まず解説文を比較してみよう。

大陸から台湾への移民が活発になったのは明治以降であるが、懐旧や目的がまちまちだったものの、彼らは大明王朝の百姓ひゃくせいをもって自任していた。が、出稼ぎに来ている間に王朝は満州人に乗っ取られ、台湾もその版図に入った。そして引きつづき日本の統治を受ける。漢人をもって自負した彼らが清代にも日本領時代にも数多くの乱を起こしたのは、むべなるかななのである。否、乱多かりしゆえに清は台湾を割譲したのであり、日本も領台初期、一億円でフランスに譲る議を起こしたと聞く。戦後、漢人の建設した民国へ復帰した台湾人の喜びは大きかった。現実には世はもはや明の昔であろうはずはなかったが、とまれ、十月二十五日、光復節が定着した。慶典のほか遊芸や花火が揚げられ、翌日から全島の運動会が始まる。（「光復節」、「台湾歳時記（32）」『燕巢』1991年12月号。下線引用者）

台湾人が日本の五〇年にわたる植民統治から解放された記念日。そしてもう一つの植民統治がはじまったともいう。漢族の台湾への移民は明代末より盛んとなるが、階級や目的がまちまちだったものの、誰もが大明王朝の百姓ひゃくせいをもって自任していた。しかるに出稼ぎ中に王朝も故国も満州人の手に渡り、台湾もその版図に入った。次いで日本の統治を受ける。漢人をもって自負した彼らが清代にも日

本領時代にも数多くの乱を起こしたのは、肝の坐り心地が悪かったからだろう。日本は領台後、台湾を持ってあましてフランスに一億円で売る閣議を開いたと伝えられるが、清も台湾を持ってあましていたのである。とまれ今日、十月二十五日の光復節には国旗がはためく。慶典、花火、運動会…したが無口の方も万千人を数える由。(「光復節^{クワン}^{フウチエ}^中」)『台湾俳句歳時記』109頁。下線引用者)

二つの「光復節」の解説文で特に違いが目立つのは下線を施した部分であろう。国民党批判がタブーとされた戒厳令が撤廃されて間もない頃と、それが気兼ねなしに行えるようになった十数年後の台湾社会との差の反映であろうか。

いっぽう「孔子祭」は副題季語の「教師節」(読み仮名なし)が「教師節^{スウチエ}^中」と中国語読みになり、新たに「孔子節」と「知恵毛抜き」が加えられているが、解説は全く変わっていない。例句が2句(ともに羽田の選)が2句入れ替えられているだけである。「豊年祭」と「重九^{ちようきゆう}節^{せつ}」も解説文はほとんど変わらず、例句8句のうち1句がどちらも黄靈芝^{ちよう}の句に換わっただけである。「重九^{ちようきゆう}節^{せつ}」は副題季語の一つだった「重陽^{ちよう}節^{せつ}」が主題季語になり、副題季語は「重陽^{ちよう}・登高^{とうこう}・菊節句^{きくせっく}・重陽^{ちよう}節^{せつ}・重九^{ちよう}」だけになって、「重九節」は姿を消している。これも台湾的なるものの重視の現れであろう。

ともあれ「台湾歳時記」の連載は評判が良かったようである。『燕巢』のある会員は次のように述べている²¹⁾。

黄先生の解説はたいへん判り易く詳述してあって軽妙洒脱、台湾特有の生活感情、自然観、背景にあるイデオロギー、人間観や気風などさまざまな関連が結びついていて、文化的基盤を明らかにしてくれます。蘊蓄をかたむけた文章表現には、なるほどなあと感服させられます。市販のガイドブックの内容より一段と優れたものがあるのに感心させられます。(以下略)

この会員は戦前期の台湾生れ、台湾の師範学校を卒業して、台湾の公学校の教師を勤めた人で、台湾の民俗や俳人・俳壇関係にも詳しく、小林里平『台湾歳時記』と三上三字搭『台湾俳句集』の台湾季語を、季節

と領域にわけてその数を表にするなど、台湾俳句に造詣の深い人であり、この評は先の阿部誠文の評にも通ずるものがあると思われる。

3 - (2) 例句の扱い方の違い——黄靈芝による主体性の貫徹

解説文は一人で書くのだから自ら努めればいい。問題は一季題に付き8句ずつ付ける例句をどうするかである。少なくとも30句くらいの候補句の中から8句の例句を選ぶのでなければよい歳時記はできない、と黄靈芝は考えたのであろう。毎月の季題4題に対して120句必要になるわけであった。そこで会員に対して、哀願・強制硬軟両様の要請で、その時々の台湾季語を詠み込んだ句を集めたという²²⁾。

……私は大方の作をこれに収め、自分自身の作は収めないことを旨とした。自分で文章を書き、且つ自分の作を例句に用いるという図太い神経は十分に持っていたが、逆から言って責任を負わないでも済むという都合のよさもあってのことである。こうして私は火炙りの刑を強いるかのごとく、月に四題ずつ、方々に例句づくりをお願いした。一題につき^{しめ}三〇句集まらなると折角のわが名文も使えないものにならないため、六法全書を睨みつつ恐喝をも敢えてし、時には乞食のごとく跪いて例句を強^せ請^びりもした。……号令はナポレオンに似てよく響き、方々のお脳は時計のごとく真夜をも働いてくれた。何しろこの七年近い間に集まった例句は、玉石混淆だったにせよ、一万句ほどにも達している（一九九六年八月）。そしてまだ続く。真実に城を築いて来たのはこの方々なのだ。

しかも、『燕巢』連載の「台湾歳時記」と『台湾俳句歳時記』との最大の違いは、余り目立たないが、むしろ例句にあるとあっていい。これらの歳時記を台湾の風物の案内書としか見ない人にとっては、ほとんど問題にならないであろうが、本来は例句あってこそその「俳句」歳時記なのだから、解説文の違い以上に例句の違いは意味が重いといえる。

例句の違いの大きいのは、まず「(1) サシバ」である。「台湾歳時記」での例句は羽田岳水が2句、黄靈芝と杜文祥が1句ずつ、それに句会に関係ない日本俳人の句が3句と計7句だった。『台湾俳句歳時記』の「さしば」では全句入れ替えられて、8句になっている。

「サシバ」 「台湾歳時記」『燕巢』1989年12月号

朴の木に低くとまりぬ青鷹 <small>もろかえり</small>	原 石鼎
雲を出て青鷹北に狩の場	飯田蛇笏
差羽鳴き風吹きしらむ杉の原	飯沼斜溪子
群翔の差羽果てなく南指し	黄靈芝
がらん鼻の燈台鵝鳩放ちたる	杜文祥
轆轤の手休めて差羽空仰ぐ	羽田岳水
一家出て差羽日和に窯開く	羽田岳水

「さしば」『台湾俳句歳時記』（2003年）

ワシタカ来る誰かに混じり迎へゐて	高宝雪
差羽来るバス着くたびに村膨れ	李秀恵
ナターシャの便り届けりさしば来る	陳錫恭
鷓 <small>さしば</small> 来る戦災孤児に薄き髻	李錦上
差羽来る北回帰線飛び越えて	陳錫樞
恒春を名にし負はせて差羽来る	傅彩澄
鷓来る国慶節を忘れずに	楊素霞
陣亡の吾子一匹に国慶鳥	黄靈芝

『燕巢』の連載では7句のうち2句だけが台湾人の句で、日本俳人の5句は日本の風景を詠んだことが明らかである。この例句の選び方は、当初羽田岳水が「台湾歳時記」をどんなものにしたかったかを端的に物語っているといえよう。そもそも「サシバ」自体が台湾季語というより日本の季語で、杜文祥の「がらん鼻」の句だけが辛うじて台湾色を出しているのであるから、あまり「台湾」歳時記らしくない。また羽田岳水の句が2句あるのに、黄靈芝の句は1句しかない（しかも羽田が手を入れたという）。これに対して、『台湾俳句歳時記』では8句全部が台湾俳人の句となり、うち少なくとも4句は台湾色が濃厚である。もっともこれほど例句が入れ替えになった季題は他にほとんどない。

例句の数は連載第一回では7句だったが、連載第二回は4句、第三回は5句、第四回からは8句に定まった。連載第五回（1990年4月号）の「媽祖祭」と「清明節」の場合を見てみよう。「媽祖祭」（媽祖生、迎

マーツォ
 媽祖)は、連載「台湾歳時記」でも『台湾俳句歳時記』でも、見出し(主題季語と副題季語)と解説文は同一といってよい。「台湾歳時記」の例句は次のようである。

爆竹は鳴らすほど富み媽祖祭	宮古紫葉
媽祖生七爺八爺も闊歩して	江苑蓮
狭巷や昼を灯して媽祖祭	江凌雪
媽祖祭供物の豚公橋銜へ	邱秀琴
媽祖春祭土着代々加護あれば	王酔生
郷関を出でて還らず媽祖祭る	王冬青
入墨の男働く媽祖祭	徐奇芬
媽祖祭孫へ名代の北港飴	葉七五三江

『台湾俳句歳時記』では、この8句の例句から邱秀琴の句を削り、代わって黄靈芝の句「媽祖祭の炉主許されてより土着」を末尾に入れ、宮古紫葉(日本人)という作者名を俳号「葉都」に置き換えただけの小さな変更である。これは「媽祖祭」という季語のせいか、「台湾歳時記」でも台湾色の強い句ばかりだったためであろう²³⁾。

同じ号の「清明節」を見てみよう(「清明」は日本でも春の季語として認められているが、同義の「墓洗ふ、展墓」などが「台湾歳時記」では同じく春(暖かい頃)なのに対し、日本では秋の季語になっている点が異なる)。

墓洗ふ三人姉妹一人寡婦	范姜梢
清明節墓地に出会へば老いにけり	陳彩瓊
清明や家系たどれば遥かなる	施耕冬
戒名の長さ先祖の墓洗ふ	楊海瑞
清明節春捲も妻もなかりけり	宮古紫葉
泥落とす墓参帰りの靴三つ	邱秀琴
墓紙のなき墓同士夕さるる	升田喜美子
墓草刈る弟らしきがはにかみて	石麗珍

これが『台湾俳句歳時記』では、宮古の句を削って黄靈芝の句に替え、

范・陳・邱・石4人の句にそれぞれ手を入れて、施・楊・升田3人の句はそのまま引き継いでいる。

展墓行三人姉妹二人寡婦	范姜梢
すれ違ふ老人同士掃墓節	陳彩璿
清明や家系たどれば遥かなる	施耕冬
戒名の長き先祖の墓洗ふ	楊海瑞
靴一つ墓参帰りの泥落とす	邱秀琴
墓草刈る孤児らしき姉おとと	石麗珍
墓紙のなき墓同士夕さるる	升田喜美子
清明やにはかに雨の霽れしこと	黄靈芝

ところで、「台湾歳時記」連載の最初の頃は、羽田岳水が例句を全部選句し、台湾俳人の句も（黄靈芝の句を含めて）羽田岳水が添削したりしていたという。その後協議の上、（後に見る黄靈芝の手紙にあるように）句の添削はしないことにして、黄靈芝と岳水が4句ずつ選び、岳水選の4句はそのことを当該句の下部に「羽田抽」の表示をすることになった。これは『燕巢』1991年6月号の「台湾歳時記（21）八田祭・乞食祭」に始まり、連載の一応の終りとなる、1998年9月号の「(190) 蟪蛄（ごきぶり）・密娑（かうもり）」まで続いている。つまりこの連載の例句の選句の大部分はこの原則によっている。

これに対して『台湾俳句歳時記』ではこの表示がなくなり、全句が黄靈芝の選になっている。また連載では黄靈芝の句が例句にほとんど含まれていなかったが（実際には変名で送られた黄靈芝の句がかなり入っていたという）、『台湾俳句歳時記』では全項目の例句に黄靈芝の句が必ず1句最後に入っている。それは出版社側から「台湾的な例句が少なすぎる」というクレームが付いたため、黄靈芝がつとめて「台湾的な句」を作って入れたためであるという。そのため連載時の例句8句から1句を削って黄靈芝の句と入れ替えたのであるが、削除されたのは決まって「羽田抽」の句であったと言っている。

3- (3) 「台湾歳時記」と『台湾俳句歳時記』の違いをもたらしたもの

既に述べたように、そもそもこの「台湾歳時記」の企画は、最初燕巢

側のほうが積極的だった。黄靈芝はこの事業の負担の大きさを考慮して初め慎重だったが、燕巢側でさっさと企画を公表してしまったため、参加せざるを得なくなった様子が見られる。この企画は一見台北俳句会にとってメリットのように見えるが、実は燕巢にとっても一つの特徴を出せる「目玉」になりうると考えられたのではないか。羽田岳水は連載「台湾歳時記」を日本俳人のための読み物として台湾のことをたくさん入れたがり、また日本俳人の吟行句を多く入れたがっていた。一方黄靈芝にとってはそういう「観光客」の句ではなく、台湾人の生活に根ざした句を多く入れようとしたという。これは収録されている日本人の句と台湾人の句の違いにも現れている。

いずれにせよこの編纂過程は決してスムーズなものではなかったらしい。黄靈芝はこの編纂過程の初期に、台北春燈句会にも参加していた有力会員の一人に、こんな手紙を続けて出していたことから察せられる(括弧内及び下線引用者)。

「台湾歳時記」は有意義な仕事に思われますし、できるだけ多くの方の句を集めて多彩なものにしたいという考えから、あのプリントをつくり、句をつくって頂きたかったのです。……(陳) 錫恭さんは羽田さんが私の句の添サクをされたことに大変こだわっておられました。……

いずれにしても、「台湾歳時記」の編纂にはいろいろな困難が横たわっているように思われ、羽田さんが例句を勝手に添削下さるといふのも如何かと思われ羽田さんの方には一応、合作辞退を表明しておきました。ただ「燕巢」誌には既に台北句会との交流のことを発表しておられるため、こちらの都合だけでそれを取り消すのも身勝手ですし無責任にも思われましたので、それに代わる何かの交流の方策がないものかと考え、幾つかの案を挙げておきました。

- ① 毎年の『台北俳句集』から句を抜き出して批評して下さること(添削ではなく)、
- ② 台北句会の中で筆の立つ人に短文なり評論なりを書いてもらうこと、
- ③ 日本の俳人が今まで台湾を詠んだ句を集め、整理して掲載する。……(1989年12月24日付)

これによれば、台北俳句会会員に台湾季語で詠んだ句を出すように依頼したことがわかる。また羽田が黄靈芝の句にも手を入れていることを、台北俳句会員が問題視していたようである²⁴⁾。①～③の「案」は「台湾歳時記」の連載に代わる両句会の交流策として出されたものだが、これでは羽田は満足しなかったであろう。ただ③は「台湾歳時記」の例句で一部実現されたといえよう。一か月足らず後、黄靈芝は同じ会員にさらに次のような手紙を送っている（下線、引用者）。

《台湾歳時記》は実を申しますと、もうかなり熱が冷めてしまい、私も興味が薄らいでしまいましたが、ただ実情として《燕巢》の方で仕事を始めてしまっておりますので、やはり協力するほかないと思います、ここ二、三日折衷案を色々考え、つぎのようにいたしたいと存じますが、それについてのご意見をお聞かせ頂けると有難く存じます。

- ① 例句を八句（または六句）に増やし、
- ② そのうちの半分（つまり八句なら四句を）羽田さんが選び、残りの四句を私が選ぶ、
- ③ この場合、四句とも台湾の人の句でなくても差し支えなし、たとえば一句を台湾の作、三句を日本の作にしてもよい、
- ④ 添削は絶対にしないこと、

という方式ではどうかと思っています。

ただ大きな問題がありますのは、陳継森さんと頼天河さんのお二人がこの仕事に不賛成の様子であるため、わたしとしても出句してほしいということを依頼するのは遠慮すべきかと思うのですが、お二人が台北春燈句会の幹事をしておられる関係上、春燈のほかの会員方が、「幹事が出句しないのに、われわれが出句するのは何となく気兼ねがあり、ために私たちも止めます」ということになりはしないかと、この点が心配なのです。……（1990年1月19日付）

この手紙によれば、先に見た1991年6月号から採用された例句掲載の方式は、かなり早い段階で黄靈芝が提案していたのであるが、実施されるまでにはいろいろ曲折があったであろうことが推測される。また春

燈台北句会に参加していた、陳継森や頼天河のような有力会員がこの企画に反対したことは、大きな悩みだったに違いない。いっぽう陳や頼らにしてみれば、すでに『春燈』という日本の句会に主体的に参加して実績を挙げており、いまさら『燕巢』というもう一つの日本の句会に参加して協力させられるのは気が進まなかったとしても不思議ではない。

さらにこの編纂作業にあまり乗り気でない会員がいた原因の一つに、言語の問題もあったようである。台湾季語には「中国語」と「台湾語」と「日本語」での表示があるが、その台湾語がほとんど全部閩南語（福建系）だったことが、客家系はくかの会員の不満を買ったといわれている²⁵）。そのために客家系の会員は必然的に台湾季語の句を詠まなくなる傾向があるという指摘がある。言語事情の複雑な台湾ならではの問題であろう。

さらに例句に関する③の提案は重要な問題を含んでいる。確かに羽田が独りで選句していた初期の段階では、(10)「七夕」のように正岡子規・本間月山など4人の日本俳人の、台湾とは何の関係もないような句を入れたりした例がある（「七夕」は『台湾俳句歳時記』では日本語読みの副題季語となり、正題季語は「七娘媽生」チイッニオマデーセンに変わっている）。しかし③の提案を容れて、「羽田抽」の4句を選ぶようになってからは、ほぼ台湾俳人の句が中心に選ばれている。これは選句の対象が台北俳句会員の句だからむしろ当然であろう。台北俳句会には永住日本人がいるし、さらに黄靈芝は「五条照」のように、架空の日本人名を用いて自作の句を例句の候補に出していた。これは『台湾俳句歳時記』の刊行された時、「台湾歳時記」にあったのと同じ句の作者名が黄靈芝に変わっているので気づくのであるが、羽田は在台日本人の句と思って選句していたのであろう。また既に述べたように、台湾俳人の詠んだ句でも「羽田抽」の句は『台湾俳句歳時記』では棄てられることが多かった。

要するに黄靈芝は、羽田による台北俳句会員の句の添削は絶対に拒否した。選句については半分だけ羽田が関わることを認めたが、それは当面の連載「台湾歳時記」においてのことであって、ずっと先に刊行される『台湾俳句歳時記』の選句は別の問題だ、と考えていたのではなからうか。こうして見ると、この台湾季語編纂過程はまさに静かなる闘いであつた、としか言いようがない。

こういうことを初め、燕巢とのさまざまな食い違いが続いたためであろうか、黄靈芝は台湾季語編纂中に、気分がくしゃくしゃして、気持ちが

のようになったことがあった、とある会員が証言している。これは編纂過程の終りの頃に多かったようである。くり返しになるが、羽田岳水は日本人のための読み物として、台湾を詠んだ日本人の句をたくさん出したが、黄霊芝は台湾人に詠ませることを目指していた。この点が一番大きな食い違いではなからうか。

「台湾歳時記」の連載は『燕巢』1998年9月号で一応終りになるが、羽田岳水は1998年8月号で次のように言っている。

台湾歳時記の執筆を八年以上に涉って続けて下さった黄霊芝先生から、一応この辺で小休止をして他のやり残しの仕事も片付けたいとの申し出なので、余り無理も言えないので意に従うことにした。九月号を以て前編を終ることになったのでお知らせして、先生に感謝申し上げたい（岳水）。

さらに同年10月号では次のように言っている。

平成二年から続いた黄霊芝先生の台湾歳時記が当人の多忙さから一応前号で掲載を終りましたが、その前半を一冊に纏めるのになお部分的に季題が不揃いなので追加されるようです。その時はまた続載頂くよう本人と連絡をとりあうつもりです。

既に379題にも達しているのに、「これではまだ半分だ」、と羽田は思っていたようである。問題はその後である。連載の終わった後、黄霊芝はなかなか「追加」を発表しない。2年半以上経った2001年6月号に、ようやく黄霊芝は「台湾の季語」一編を寄稿している。その内容は「城シヨンオンツュー・キムラアア・ほんざくろ隍祭」・「鹹蚵仔」（副題季語なし）・「番石榴」の三季題で、解説文も例句も『台湾俳句歳時記』と全く同じである。副題季語はいずれも台湾語読みを主体としている。しかもこの三季題は「追加」ではなく、既に連載したものの「改訂」である。連載された「台湾歳時記」との一番大きな違いは例句である。「台湾歳時記」では連載終了まで、8句のうち後半の4句が「羽田抽」とされていたのだが、この「台湾の季語」では例句が全部黄霊芝の選になっており、「羽田抽」の表示がなくなっていたのである。

こうして見ると、「台湾歳時記」連載終了後に、一回だけ「捕捉」するかのように寄せたこの「台湾の季語」は、実は補充ではなく「台湾歳時記」はこのように改訂して上梓しますよ、という無言の(?)宣言だったとしか思われぬ。羽田岳水にはかなりショックだったのではなからうか。解説文はもともと黄靈芝の筆になっているが、選句まで全部黄靈芝によるとなると、「合作」の意味がなくなってしまうと羽田は思ったかもしれない。逆に言えばこの「台湾の季語」に至って、初めて黄靈芝は自分の意図をほぼ完全に貫いたのだと考えられる。連載の「休止」は自分の意図を実現するための時間稼ぎ、作戦だったのかもしれない。解説文の改訂もさることながら、その主要な狙いは「羽田抽」句の削除だったのではなからうか。しかもこの「台湾の季語」は一回だけで終わっており「続載」はなかったから、羽田には介入の余地がまずなかったであろう。黄靈芝はその後2年近くの間、再び『燕巢』には何も寄稿していない。羽田の方も1998年10月号以来、「台湾歳時記」や『台湾俳句歳時記』については、『燕巢』誌上で一言も述べていない。「本人と連絡をとりあう」ことはなかったとしか思われぬ。

黄靈芝は2003年3月号にやっと「靈芝まんだら—選句について—」という一文を寄せるのだが、これは台北俳句会の例会への投句を、自分がどう選句しているか、その基準を述べた文で、すぐ翌月に刊行される『台湾俳句歳時記』については何も述べていない。しかも見方によれば、これはまことに意味深長な文である。「靈芝まんだら」の「選句」の基準を簡単に言えば、俳句には「何を詠むか」(主題の問題)と「どう詠むか」(方法の問題)の両方の問題があるが、主題と作為の両方の優れた作は得難いから、選句の基準は「主題」を先にして「方法=技巧」を後回しにすると、黄靈芝はいうのである。

……この世の俳句の多くは、主題に秀で、作為に弱い、とかその逆が多いのです。この時に選をする時、どちらを優先させるか、という問題が起きます。せめてどちらかを選ぶわけです。その結果、主題優先の私はいつも「主題が趣ぶかく、且つ新しい」ことに執心し、●じるしをつけるわけです。

直接には台北俳句会の例会における主宰選句の基準を述べているのだが、発表時期の微妙さからして、すぐ後で刊行される『台湾俳句歳時記』で、例句の「選句」基準を大幅に変えてしまったことの暗示的な予告だったのではないかと取れよう。——「選句」は黄靈芝流に行いました。岳水先生なら、技法に優れた句の方を多く採られたかもしれませんが、むしろ主題の捉え方が興味深い句に替えました、と。黄靈芝一流の皮肉とも受け取れる。

このように「台湾歳時記」の連載では、はじめ羽田岳水＝燕巢俳句会側の関与が大きく、いわば岳水ペースで進められていたのだが、少しずつ黄靈芝＝台北俳句会側が編纂の主体となり、最終的に『台湾俳句歳時記』として結実した段階では、黄靈芝の意図した台湾色が十分に発揮されるようになっていた。協力関係のように見えながら、燕巢俳句会の羽田岳水と台北俳句会の黄靈芝の間には、微妙なすれ違いのように見えて、実際にはかなり大きなギャップがあったのであるが、それは黄靈芝によって最終的に克服されたといえよう²⁶⁾。

だがそのギャップは『台湾俳句歳時記』刊行後も、あちこちにその影を落としている。黄靈芝は『台湾俳句歳時記』の末尾に載せた「台湾歳時記と台湾季語」で、羽田から台湾歳時記の編纂に協力を求められたことを記している。また『燕巢』での「台湾歳時記」の連載についてもかなり具体的に述べている。そして「あとがき」では、「本書は『燕巢』俳句会の羽田岳水主宰をはじめ『燕巢』の方々のご声援と励ましなくしては生まれなかった一著であり、かけがえのないご芳情には報いる術を知らないほど感謝」しているとも述べている。だがその一方で黄靈芝は、「一般的な概念からいえば、当然羽田岳水先生に序文をお乞いするのが建前だと思いつつも、それをご遠慮申しました。書中にどのような不手際や不始末が居座っているやも知れず、かかる著者の仕出かしたへまは自分で責めを負うべきだと思うからにはほかなりません」と断っている。理屈は通っているように見えるが、「慇懃無礼」に断ったととれないこともない。

こうして『台湾俳句歳時記』は、一見したところ燕巢俳句会や羽田岳水との関わりが見えない形で刊行された。羽田はかなり不満であったのではあるまいか。それは『台湾俳句歳時記』の刊行について、『燕巢』としては誌上で全く言及していないことによく表れているように思われ

る。岳水は以前「この企画（「台湾歳時記」の連載）が完成の暁には、日台相互に分りやすいようまとめて発刊して頂けると思います」（1993年2月号）と言っていたように、『台湾俳句歳時記』は本来燕巢俳句会にとっても「待望の書」だったはずである。それなのに『燕巢』誌上には、刊行の予告もなければ、刊行後も岳水による紹介や推薦のような文は全く現れていない。

一方で、『燕巢』には刊行した言叢社による『台湾俳句歳時記』の一面ページ全面広告が7回にわたって載っている（2003年5月号・7月号・9月号～2004年1月号）。7回とも全く同一内容とスタイルで、しかもその最初の広告は、同書と『燕巢』との関わり——「台湾歳時記」の連載——について全く触れていなかった。第二回目の広告からは、末尾に「『燕巢』へ一九九〇年（平成二年）より九年にわたり続載したものに、なお項を加えて上梓したものです」と付加するようになったのであるが、これは同書が『燕巢』との「合作」であることを無視しているように映ったのではあるまいか。岳水も同人も一般会員も、『台湾俳句歳時記』の刊行について、『燕巢』誌上で一言も言及していないのは、こういうことも関係しているかもしれない。一種の「同床異夢」に終わったということではなかろうか。

いっぽう『燕巢』に連載された「台湾歳時記」については、林やすし「台湾の歳時記」（1997年1月号）、石川清一「台湾歳時記刊行を待つ」（1998年7月号）があり、また一応連載が終わった段階で、阿部誠文に評を依頼したことに『燕巢』1998年10月号で羽田が触れている²⁷。『台湾俳句歳時記』の場合とは全く対照的な対応であった。これ以後羽田岳水＝燕巢俳句会と黄靈芝＝台北俳句会の交流は、第四期に入ってから『燕巢』廃刊まで一応続くのだが、何となくよそよそしさを感じさせるものになったことは否めない。

4. 第三期『台北俳句集』の「あとがき」の特性 ——俳句文化論への転生——

4- (1) 「あとがき」の『燕巢』への転載から『燕巢』掲載文の「あとがき」への転用

台北俳句会第三期の特徴は、『台北俳句集』の「あとがき」にもよく現れている。最初に黄靈芝が執筆した「あとがき」の長さやテーマ及び『燕巢』との関わりを以下に示す。標題のうち「 」のついているものは最初の発表当時に付けられた標題で、ないものは『黄靈芝作品集18』に収めるに当たり、黄自身がつけた標題である。()内は初出であるが、加筆されているものもある。第24集・25集の「あとがき」は『台湾俳句歳時記』の末尾に同じ標題でそのまま収録されている。なお第27～29集の「あとがき」は黄靈芝の執筆ではなく、編集委員による短い形式的なものである。

集 (刊行年月)	あとがき頁数	標題と初出年月
		*は末尾に「台湾季語」の解説欄あり。
第18集 (1989年8月)	6	俳句の前書と句評
第19集 (1991年3月)	30	「《自句自解》と《短歌の半分》」(初出『燕巢』1990年2月号～5月号)
第20集 (1992年5月)	15	「俳句歳時記について」(初出『燕巢』1991年1月号～2月号)
第21集 (1993年2月)	9*	日本文化は貧から生まれた(初出『燕巢』1990年12月号、原題:「いくつかの問題(3)」)
第22集 (1994年6月)	38*	「ありげな問題のいくつか—国際交流での」
第23集 (1995年10月)	30*	「文法—間違っているかも知れませんが—(1995年5月14日、日本との交流句会に際して、一部加筆)」(初出『燕巢』1995年6月号)
第24集 (1997年3月)	27*	「《台湾歳時記》と《台湾季語》」(初出『燕巢』創立40周年記念、1996年10月号)
第25集 (1998年12月)	59*	「戦後の台湾俳句—日本語と漢語での—」(初出『燕巢』1998年1・2月号)
第26集 (2000年6月)	83	「日本文化の原点—とんちんかん論法での」(初出『燕巢』1999年4月号～12月号)
第27集 (2000年12月)	1	ごく短い「附記」(編集委員による)

第28集(2001年10月)	2	短い説明的「後記」(編集委員による)
第29集(2002年1月)	1	ごく短い「後記」(編集委員による)

燕巣俳句会との交流が盛んになるということは、黄霊芝や台北俳句会員と『燕巣』との関わりが濃厚になることである。初めのうち黄霊芝は請われるままに『台北俳句集』の「あとがき」を『燕巣』に転載していた。最初の例は既に見たように、第13集(1984年)の「あとがき」(原文は無題)を、『燕巣』1987年11月号に「季語について」として掲載したことである。次に『黄霊芝作品集 6』(1982年)の「自序」に「漢字考」という題を付けて1988年11月号に載せている。さらに第10集の「あとがき」が「敏感に——言葉・文字——」という題を付けられて『燕巣』1990年1月号に、第16集の「あとがき」が「ちゃんぽん」という題を付けられて『燕巣』1989年12月号に、第11集(1982年)の「あとがき」が「盗作について」という題を付けられて『燕巣』1990年6月号に掲載されているのである。

4- (2) 句評と言えぬ句評——第18集の「あとがき」

第18集(1989年8月)の「あとがき」は末尾に、岳水の「賛助出詠」の謝辞が数行あるだけなので、また内容的にも後書き的で6頁と短い。だが俳句に関する論ではあるものの、この第18集に関係があるわけではない。これはむしろ正式に交流することになった『燕巣』に対する批判と見られるのである。内容を結論的に言えば、俳句には前書きは不要であり、また作者についての情報も不要である。俳句はそういう知識なしに、それ自体が鑑賞されるに足るものでなければならない、という論である。

黄霊芝はまず手許にある俳誌(S誌とY誌)から、例として挙げるだけであって、「誹謗の心あってのことではない」と断りながら、二つの句の句評を抜いている。「評者と掲載誌は一応匿名とした」となっているが、前者が『春燈』、後者が『燕巣』の句であることは疑いない。批判の狙いは同じなので、ここでは前者の句評を挙げる²⁸⁾(下線原文)。

親一人子一人蛍光りけり 久保田万太郎
昭和十九年戦争も酷になりつつあった頃、親子二人の家庭に突然

召集令状が舞い込み、これを手にされた先生のお気持ちは、察するに余りあるものがある。別れの耕一さんを讃える「蛍光りけり」は絶妙と言わねばならない。

黄靈芝は「傍線の部分は作者と特別なかわりがない限り、まずは知ることのできない作者の《背景》である。すなわち句を通じただけでは、一般読者に知り得べくもない事柄である。……いわば前書に相当する。しかるに、これらの句には前書はつけられていない」として、つまり「評者が作者に代わって前書を付し」、「または前書を前提条件として鑑賞した」ことになる。これは「句に対する冒流（俳句は前書なしには鑑賞できないほど表現力に乏しいものなのか）」であり「作者に対する冒流（作者は前書なしで賞味して欲しかったはずである）」ではないかというのである。

二番目の句「眼帯の中に惑ふ眼春の雷 大竹きみ江」に対する句評（長文なので省略）も、黄の批判の趣旨は全く同様であるが、さらに作者に対する個人的な挨拶の言葉まで句評に込められていることも批判の対象となっている。そして、このような「観念や気風が日本の俳壇にあまりにも多く、あたかもそれが当然であるかのような現状への反撥にほかならず、また一外国人である私をして俳句を庇わしめてのことである」という。誌名は伏せたといってもY誌とあり、作者名もあるのだから、『燕巢』が批判の対象になっていることは自明である。

この第18集の「あとがき」は「いくつかの問題 (1)」という題で、『燕巢』1990年10月号に載せられている。つまり黄靈芝は『燕巢』との正式の交流の始まる直前に刊行された『台北俳句集』の「あとがき」に、燕巢俳句会ないし日本の俳壇を批判するような文を載せただけでなく、それが5回にわたる『燕巢』の連載の冒頭を飾ったわけである。小なりと雖も台湾俳句の独自性を自負する、黄靈芝の気骨を示すものであろう。そして燕巢俳句会との関係が濃くなると同時に、燕巢を主たる対象としながら、俳句観や俳句論を深めていこうという方向が、早速台北俳句集の「あとがき」に現れているのである（なお「いくつかの問題 (2)」(『燕巢』1990年11月号)も、批判とまでは言えないものの、日本の俳句結社の慣行を揶揄するかのような文になっているが、こちらは『台北俳句集』の「あとがき」とは関係がない)。

第18集の「あとがき」はこのように一応俳句集のあとがきらしいものであったが、『台北俳句集』の第19集以後になると、それ以前とは逆に『燕巢』に掲載した文が「あとがき」に転用されるようになった。第20集・第21集・第23集・第24集・第25号・第26集の「あとがき」がそれである²⁹⁾。

このように『燕巢』との関係は、黄靈芝による『台北俳句集』の「あとがき」の内容と性格にも大きな変化をもたらした。第二期までの「あとがき」は、少なくともその句集に掲載されることを期待して書かれたものであった。しかし第三期になるとその性格が変わってくる。第18集の「あとがき」はそれまでと同じく、一応この俳句集のために書いたものと思われるが、第19集以後26集までのあとがきは、たまたまその時点で刊行済みの文を適当に載せたのであって、「あとがき」と称しているものの、その句集のために用意されたものではない。この傾向はだんだん激しくなり、第26集で最大に達する。同時に内容も俳句集の「あとがき」としては問題が出て来る。「俳句歳時記」や「台湾歳時記」など、俳句にかかわりの深いテーマもあるが、それを離れて「日本文化と貧」「国際交流」「文法」「日本文化の原点」など、次第に句作とはかけ離れた文化論へと傾斜していくのである。「俳句集」の内容に関係ないだけでなく、時には俳句にさえ関係がないようなことを論じているのである。

この『燕巢』の掲載文を連載数号分をまとめて載せたりするのだから、いきおい「あとがき」が長くなる道理である。第19集の「あとがき」は30ページ、第20集は15ページ、第21集は9ページとやや短い、第22集は38ページ、第23集は30ページ、第24集は27ページ、第25集は59ページ、第26集に至っては、本文（俳句集＝投句者61人）の122ページに対し、「あとがき」がなんと83ページと本文の三分の二にも達している。とても「あとがき」とはいえない長さである。

これに対してはさすがに会員の中から批判が出らしい。第27集から第31集までの「あとがき」は、黄靈芝の執筆ではなくなり、編集委員によるごく短い形式的なものに換わっている。第32集からはまた黄靈芝の筆に戻るが、一部を除き短い、殆ど形式的なものになっている。

4 - (3) 「短歌の半分」論の発展——第19集の「あとがき」

第19集（1991年3月）の「あとがき」は、30ページとぐっと長くな

ると共に、『自句自解』と『短歌の半分』と、それまでなかった標題が付いている。これは『燕巢』1990年2月号～5月号に4回にわたって連載した、同題のかなり長い文の転載である。つまり句集とは直接関係のない文章が、句集の「あとがき」として転用されるようになったのである。

これは既に第10集の「あとがき」で試みた「短歌の半分論」の発展である。黄靈芝は実例を挙げながら、概ね次のように述べる。「自句自解」には二通りある。一つは「句からだけでは窺い得ない内容までを含み、この句のつくられた当時の状況、動機やその前後を述べ、いわば句の《背景》または《前書》が示されている」ものである。もう一つは「真実には句を文章に書き変えただけのものにすぎず、いやしくも句を嗜むほどの人間なら原句を読んだだけですぐに納得できるはずの内容でしかない」ものである。後者は問題にならないが、前者も下の句を付けて短歌にしてみれば、足りることである、と。

そこから二章体（という言葉は用いないで）の俳句論になる。

……俳句とは「最も短い詩」である。

ところで「味」は料理の取りあわせの中から生まれ、「音」はものを触れあわせることにより得られる……俳句は「二つの物」でつくる詩なのである。三つでは多すぎて俳句にならず、一つからでは詩は生まれない。（中略）

ここでいう「物」とは真実には「物」と「事」を含む。従って俳句は「二つの物」または「二つの事」あるいは「一つの物と一つの事」を組みあわせてつくられる。多すぎでは俳句にならず、一つだけでは——これが「短歌の半分」の正体である——と思う。（中略）

俳句は切れ字によって二つに切れるとはいうものの、その反面どこかでつながっていないければ一つの作品にならない。……ゆえに作品としての俳句がもち得る切れの限界は「一応完全に」切れるのが最大で、いわば罪人を打ち首にする時、喉の皮を少し残して切るのに似ている。

そこで二つの「物」あるいは「事」の「切れ」が問題になるのだが、それには次のような四種類があるという。

- (1) 全く切れるもの
古池や 蛙飛びこむ水の音
- (2) 半分ほど切れるもの
庭下駄も洗ひて 今年の終ひ風呂
- (3) 半分ほど、またはやや少なく切れるもの
遠雷の 聞けば聞ゆる島向ふ
- (4) 何となく切れるもの
春聯を書く 達筆の 男ぶり

これら四種類だけが「句を二つに切る」のであり、それが「短歌の半分」から救っているのだという。従って次のような句は（切れがないから）すべて「短歌の半分」であり、俳句とはいえないという。

摘みゆけど 春の七草 揃はざる
山羊を守る子の 腹当 のまくれなる

これはいわゆる「一物仕立て」の句のことであろう。もっとも芭蕉は弟子の資質によって、この種の句も認めていたというけれども。黄靈芝の論はこの先「切れ」の深浅や「連歌」との関わりなど、まだかなり続くが、今はここまでにしよう。台北俳句会での黄靈芝の句評に出てくる論拠は、おおむねここまでであるから。「短歌の半分」と関連して登場する「連歌」については、黄靈芝の理解に疑念もあるが、今は論じないでおく。

4 - (4) 日本歳時記の批判——第20集（1992年5月）の「あとがき」

第20集（1992年5月）の「あとがき——俳句歳時記について」は、さきの1991年1月号の「いくつかの問題（4）」と、同年2月号の「いくつかの問題（5）」の転用である。

「あとがき——歳時記について」は日本の俳句歳時記に対する、台湾人の立場からの「戸惑い」、つまり批判である。「季語」という「約束事」があるのは、遊びには共通の規則が必要だという意味で納得できるし、「詩が生活体験の中から生まれるものである以上、季節感とかかわりのあることも納得できる」。だが夏の季語とされている「薔薇」は、

台湾では冬でないといふ美花が咲かないなど地域性の問題があり、品種改良などによって季節が異なってくることもある。というような、戦前期台湾に渡った日本俳人を悩ませたような季感のずれに始まって、民族や文化による違いもあれば、解説者による違い、時代による季の違いもある。「花畑」が秋で、「お花畑」が夏というような紛らわしい季語や、「冬瓜」が秋というように名称自体季感にそぐわない季語もあるという。さらに分類の仕方について事細かに論じている。時まさに「台湾歳時記」の連載中のことであるから、これらの疑念や批判は『台湾俳句歳時記』の編纂に生かされたであろう。

4 - (5) 俳句文化論から日本文化論へ——第21集～26集の「あとがき」

第21集（1993年2月）の「あとがき」（無題だが「日本文化は貧から生まれた」に始まる）は、遡って1990年12月号の「いくつかの問題（3）」の転用である。この「あとがき」は「日本文化は貧から生まれた。といったら笑われるであろうか。それとも叱られるかもしれない。二十世紀末現在、日本は世界屈指の富豪国なのだから。しかし私はまじめなことをいっているのである」に始まる。俳句論というよりは文化論である。黄靈芝は甲州の猿橋の一風変わった構造に「中国建築の影響がみられる」として次のように言う。

日本の文化——というより日本人の精神構造は、過去に中国文化の影響を少なからず受けて来た。その時期は大きく分けて二つあり、隋唐時代と宋代がそれである。（中略）日本が隋唐から受けつくだのは絢爛たる貴族文化であり（十二単の文化だともいえる）、宋からのそれは質素な、貧から出発したに違いない理学または禅の文化であった。

だが隋唐の文化はそれほど広範囲に広まらなかったが、宋の「貧の文化」は日本の一般社会に普遍的にしみついたのではないかと、黄靈芝はいい、猿橋の構造にその実例を求めている。そして「猿橋に見られる文化は、第一に資材の不足ないし無駄を罪悪視する心情、第二に合理性へのあこがれ、第三に芸術的センス、第四に宗教心という四者の結合によったものに違いない。これは日本文化の他の分野にも普遍的に見られ

る気質である」という。つまり日本文化の原点は「貧」にあり、決して「富」にはない。しかもその貧から生まれたものが高額で取引されるといふ、不可思議な文化現象がみられる、と。

この「あとがき」の次のような結びは、黄靈芝特有の皮肉たっぷりな言い回しの典型であろう。

私は俳句もまた「貧」から生まれた文芸だと思っている。十七音さえあれば誰にでも気軽に遊べるということは、懐に十七円しかなくても結構遊び得ることに近いから、貧者向きの文芸である。しかし今日、俳句は俳人たちの手によって洗練され、十七音を用いるためには十七万音の中から選択しなければならないほど豪華な遊びとなっている。今に俳句の一句が数千万円に売れるに違いない。いや、なぜ売れないのだろう。

第22集の「あとがき」＝「ありがた問題のいくつか——国際交流での」は、俳句の国際交流に関連して、中国（大陸）では漢字を十七字並べる「漢俳」が盛んだというのに、台湾にはなぜこれが普及しないのだろうか、という質問に答える形で、中国語による「現代俳句」を論じたものである。この文は『燕巢』に載ったものの転載ではないが、この集に掲載されている会員の句や、その年度の句会活動などには直接かわりがない、一般的なエッセイである。

第23集の「あとがき」＝「文法——間違っているかも知れませんが」（一九九五年五月一四日、日本との交流句会に際し）は、『燕巢』1995年6月号に掲載された同題の文に、かなり加筆したものである。この文の前半は、文法論というより創作における文法的な誤りを論じたもので、エッセイとしては面白いが、台北俳句会での俳句との関わりは見られない。しかし後半部——特にその前半——は取り上げざるをえない問題を含んでいる。以下は『燕巢』に掲載された文からの引用である。

日本の文芸書を繙くと文法の誤りと思われるものが随所に散見されます。一体それでよいのだろうかという疑問を私は数十年来持ちつけてきました。文法を誤ると意味が違ってしまふからです。た

たとえば、過去と完了の相違は、酒さえ少し飲めば読者として野暮^{ママ}はいわないのが普通ですが、自動詞と他動詞、四段活用と下二段活用の連体形、未然形と已然形…が誤用されたとしたら—いいかえれば、画家が虎を描いたものを猫として鑑賞し、更にそれを良しとするに至ったとしたら、いったい文化とは何だろうという原点に舞い戻らなければならない道理となります。もちろん、言葉なるものは、当方が言い間違えたものを相手が聞き間違えてさえしてくれれば、何の問題も起きません。ですから一億総文法音痴になるのがいちばん簡単で、そうすれば天下は安らかになります。

この「文法——間違っているかもしれませんが」に羽田岳水がかなり詳しい「追記」を付しているのは、まさにこの部分に関してである。台湾の日本語文芸におけるかなり重要な問題を指摘しているので、多少長くなるが紹介しよう。

右の一文は台北俳句会の黄靈芝先生が毎月執筆している「ご参考までに」の本年五月例会での一篇です。該句会のプリントは台湾在住の燕巢会員が送ってくれるので、常々目にしております。今回の一篇は私たち日本人がつい疎かにしがちな文法を論じたもので、参考になろうかと思い、転載方お願いしました。

殊に今回の台北五月句会では『軸』の主宰河合凱夫先生を団長に支部長の方四人、重要同人、それに現代俳句協会幹事花房治美子先生ほかの諸先生を交え、日本学生俳句協会の水野あきら先生を事務長として組まれた33名から成る訪台団を迎えての、そして受入側の台北俳句会の他に東呉大学の師生20名、中国文俳句会会員、雑誌記者などの若干名を加えた100名近い大会合であり、私としても強い関心を寄せておりました。

右の一文は二節に分かれ、前半では文法を論じておりますが、後半部では高名な日本の俳人を迎えるという前提に立っての追加らしい書き方であり、温厚な性格の黄先生の文章としては棘がありげです。一体なぜなのだろうということが何となく気になります。

台湾在住の燕巢会員に問い合わせ得られた情報により、一つの手がかりがつかめました。それは四月三十日にNHKが「台湾万葉

集」と題して台湾の日本短歌作家約10名を採訪した番組でしたが、放映が終わった途端に黄先生宅に見知らぬ人からの電話が次々に入り、先生が罵られたそうです。君たち日本文芸愛好者は今でも植民地の犬になりたいのか、というお叱りでした。今回のNHKの企画に先生は全然かかわっていない由ですが、台湾俳句会の責任者ゆえに矢面に立たされてしまったのです。先生は平身低頭して謝ったということでした。(下線=引用者)

戒厳令は疾うに解除され、権力側からの俳句会や短歌会への脅迫の怖れのようなことはなくなっていたにしても、日本語の俳句や短歌は「台湾文学」——敢えて言えば「まともな」台湾人の携わるべき文芸行為——としては、一般的に認められていなかった、ということであろう。黄靈芝がどんなに「親日派」ではないことを示そうとしても、日本語で詠むということだけで非難攻撃されたのである。まして日本側の代表的な文芸団体との交流があるとすれば、なおさらのことだったであろう。台湾文芸として受け入れられない、これは権力側から拒否される以上に、応えることだったかもしれない。

それにしても短歌を取り上げた番組なのに、台北歌壇の呉建堂ならとにかく、俳句会会長の黄靈芝に抗議するのは場違いではなからうか、と思われるのだが、やはり日本語で詠むのだから、「同じ穴の貉」だとされたのであろうか。羽田岳水の「追記」の末尾を見ると、後で来た黄靈芝からの手紙には、あの文は「日本の先生方がお読みになれば、必ずやご不快になるだろうことを承知の上で、あるいはそれ故に、敢えて書かせていただきました。《原因はアリバイづくりであります》と結んで」いたという。「戦後台湾俳句小史(二)」の末尾で指摘した、「日本の、またはその文芸の《粗さがし》をしては文に書いたりしたという「アリバイづくり」³⁰⁾がその頃になっても、相手は変わっていたが、依然続いていたということである。

第24集(1997年3月)の「あとがき」は、「台湾歳時記と台湾季語」(『燕巢』1996年10月号)の転載、第25集(1998年12月)の「あとがき」は、「戦後の台湾俳句——日本語と漢語での」(『燕巢』1998年1～2月号)の転載である。この二文は『黄靈芝作品集 18』2000年に転載され、さらに『台湾俳句歳時記』(2003年)にも転載されて、解説とし

て重要な役割を果たしている。これについてはすでに要点を他で引用しており、これからも引用するはずなので、ここでは触れずにおく。

このような転載の最後となる、第26集の「日本文化の原点——とんちかん論法での」という長大な「あとがき」は、『燕巢』1999年4月号から12月号に8回に涉って連載されたものだった。もはや俳句論でさえなく、一般会員が興味を持つとは思えない、しかもこの第26集212頁中83頁にも及ぶ、放談の集積のような「あとがき」には、さすがに会員から批判が出たようである。そのためか、次の第27集より後の「あとがき」は、黄霊芝ではなく、編集委員の作成したごく短い「附記」ないし「後記」に変わっている。

だがこうした過程を通じて『燕巢』誌が黄霊芝の俳句論（更に発展して文化論などのエッセイ）の発表の場となったこと自体は、機関誌を持たない台北俳句会にとっては、重要な意義があったと思われる。その多くが羽田岳水による、黄霊芝のプリント「ご参考までに」の転載によるとすれば、羽田の貢献も大きかったといえよう。

2004年の正岡子規国際俳句賞の受賞を機に、第32集（2005年7月）から黄霊芝の「あとがき」が復活するが、内容は殆ど形式的なものか、回想的あるいは解題的なもので、長くても10ページ以下と、ほぼ第二期以前の長さに戻っている。

5 おわりに——台湾俳句の主体性を貫く闘い

台北俳句会は、台湾俳人を主体とする独立した俳句結社（黄霊芝によれば「グループ」）であるが、創立以来幾つかの日本の俳句結社との関わりがあった。会長黄霊芝が関わった（関らざるを得なかった）主要な日本の俳句結社は、創成期の『七彩』、発展期の『春燈』、高原期から成熟期にかけての『燕巢』であるが、会長・黄霊芝はいずれの場合も台北俳句会の主体性の維持に苦心したといえよう。

『七彩』は台北俳句会の誕生に直接かかわる結社で、その支部であったのだが、脱退・独立した。

『春燈』は、有力会員の多くが参加したが、黄霊芝は参加しなかった。古い会員によれば「黄霊芝先生は春燈が嫌いだったから」というのだが、好き嫌いを越えて、万一黄霊芝も台北春燈句会に「参加」していたらど

ういうことになっていただろうか。別に春燈の主宰から台北俳句会に交流の申し出があったわけではない。台北春燈句会の幹事ないし指導者・加藤山椒魚は春燈の同人でさえない一会員に過ぎなかった。しかも加藤は台北俳句会に一度出ただけで、欠席投句の招請を受けても応じなかった。いやしくも会長である黄靈芝がそんな句会に参加できるとは思えない。春燈主宰の招請で「賛助出詠」として『春燈』に句を寄せるというのなら別であるが、一支部である「台北春燈句会」に他の会員同様に参加すれば、最初期の『七彩』の場合と同じように、黄靈芝の句まで春燈主宰の選を受けるようなことになり、つまり台北俳句会そのものが春燈の台湾支部になったと同じことになろう。台北俳句会の独立性を維持するためにも、黄靈芝が動いてはならなかったのである。

それに対して、『燕巢』との関係では、主宰の羽田岳水が直接乗り込んできた。施耕冬や杜文祥のような縁故関係を通じて、台北俳句会と公的な友好関係を持つことを工作してきた。しかも羽田岳水によって持ちかけられた台湾季語の編纂の問題は、黄靈芝も両俳句会の協働作業として正式にこれに応じるだけの根拠があったと思われる。『春燈』の場合にはたとえ「熱心な会員たち」を通じて、台北俳句会の俳句力が向上したとしても、独立した俳句結社にとって、決して名誉なこととは言えなかった。しかし台湾歳時記の問題は、台湾俳句の独自性、ひいては台北俳句会の独自性・アイデンティティの確立につながるものがある。結社と結社の契約として正面から受けて立つだけの積極的な意義があると思われたのではなかろうか。

しかし「台湾歳時記」の連載は、両句会の協働作業というものの、最初のうちは羽田岳水に主導権を握られていた。黄靈芝の名で連載される以上、解説文は黄靈芝が書くのが当然だとしても、俳句歳時記の生命である例句の選句は、句の添削まで含めて最初は羽田が握るつもりであった。解説文を黄靈芝に任せることは、最初の段階でけりがついていたが、例句の選句についてはなかなか黄靈芝が主導権を握れなかった。最初のうちは黄靈芝の句にさえ岳水が手を入れていた。間もなく半分は黄靈芝選による例句になったが、連載の最後まで例句の半分の4句は、下に点線を引いて「羽田抽」とわざわざ断っていた。いささか奇異な感じなしとしない。さらに岳水は出来るだけ日本人の句を多くしようとしていた。台湾季語で句作する面白さを日本の俳人に訴え、それを特色と

して、『燕巢』を成長させようとしたのだとも考えられる。そのために
も例句の選を完全に黄靈芝に任せることはできないと思ったのであろう。

だが黄靈芝にしてみれば、それでは観光俳句になってしまう。台湾俳
句はあくまで台湾俳人の主体性発揮の場でなければならなかった。そこ
で黄靈芝は用意周到に、まずそのモデルを「台湾の季語」（『燕巢』2001
年6月号）に発表し、2年後の『台湾俳句歳時記』では、ついに全編で
これを実現したのである。

「台湾歳時記」がまとまって刊行される時、羽田としては当然「例句
8句中半分は羽田の抽出句」という原則が実現されるものと思っていた
であろう。それが「台湾の季語」では、完全に黄靈芝による選句（＝羽
田の抽出句を認めず、大部分を台湾俳人の句にすること）になっていた。
唯一回の掲載であったので羽田はそれほど問題視しなかったかもしれな
い。しかしこれこそが、それから2年後に刊行される『台湾俳句歳時
記』の完全なモデルとなるものであった。しかもそのことに黄靈芝は全
く触れていないのである。

これは「静かなる闘い」だった。台湾歳時記の編纂は、もともと羽田
から持ちかけた話であり、最初黄靈芝は躊躇していた節がある。それが
結果としては、全面的に黄靈芝の思いを実現したものになったのである。
これは台北俳句会第三期全体を通じて進行した、台湾俳句の主体性を貫
くための闘いであったと言えよう。

同時に台北俳句集の「あとがき」を中心に展開された、黄靈芝の俳句
論ないし日本文化論は、この時期に最も華々しかったと言える。『黄靈
芝作品集 18』（2000年12月）には『台北俳句集』第5集から第26集
までの「あとがき」（第5・6集は「はじめに」）が収録されているが、
これは事実上黄靈芝俳句論の中核的資料となっている。事実これ以後、
黄靈芝はまとまった俳句論を出していないのである³¹⁾。『燕巢』の貢献
はこの面でも大きかったと言えよう。

最後に、第三期における戦後台湾の日本語短詩文芸活動上の大きな出
来事として、1994年7月台北川柳会（現・台湾川柳会）が発足したこと
に一言触れる必要がある。最初のメンバーは黄靈芝・頼天河・呉建
堂・李瑄璋・三村昌弘・張宣焮・杜文祥・廖運藩の8名で全員台北俳句
会員、初代会長は頼天河だった。これは台北俳句会の発足当時のメン
バーが全員台北歌壇員だったのにも例えられよう³²⁾。これで台北俳句会

のメンバーが関わりをもつ日本語短詩結社として、台北歌壇・台北春燈句会・台北川柳会と三つの結社が台北に存在することになったわけであり、これらの全てに関わる会員も現れた。しかし台北川柳会の出現は第三期の半ばのことではあるが、「台湾歳時記」の編纂の最中でもあり、台北俳句会との内面的な関わりらしいものは明らかでない。

(未完)

註

- 1) この時期に入って第四期（成熟期）以降まで残った主な人たちに、游細幼（第18集）、張継昭（第20集）、林蘇綿（第21集）、李錦上・藤原若菜（第23集）などがある。
- 2) 実は台湾季語句は第1集からあり、第一期を通じて次第に増えているが、『春燈』との関係が生まれた第二期には減退の傾向を見せている。この点は次回の『戦後台湾俳句小史（六）』で論じた。
- 3) 磯田一雄「黄靈芝の俳句観と《台湾俳句》」『成城文藝』第201号2007年12月、36-44頁。
- 4) 岡崎郁子『黄靈芝物語——ある日文台湾作家の軌跡』研文出版、2004年、62-63ページ参照。なお『燕巢』2004年6月号に「千代田葛彦特集」がある。
- 5) 『燕巢』1987年11月号「あとがき」。なお羽田岳水は黄靈芝の「あとがき」に「季語について」と標題をつけながら、ここでは「俳句について」と誤記している。
- 6) 未完に終わったが、『燕巢』2000年1月号から廃刊の2010年12月号まで、132回に及ぶ阿部誠文「台湾俳壇史」の長期連載があるのもその一つであろう。
- 7) 『台北俳句集』の第19集で岳水は、無題ではあるが、「檳榔」「金紙焼く」「停止脚」「夜來香」など台湾季語を用いた句や、季語ではないが「竹筏」「天后宮」「豚の足」など台湾色の濃い風景を配置して、台湾的な句を「模範」のように掲載している。第22集では岳水が「雪女」という題で日本詠の句を出しているのに、せいぎは「月祀る」と題して、台湾の風景を詠んだ句を載せているのが対照的である。第23集は、岳水が寧夏や陽関・駱駝などを詠み込んだ中国旅行句を交えた日本詠の句を主に出しているのに、福島は題無しの台湾詠とこれも対照的である。しかし第24・25・26集では二人とも日本詠、第27集は福島のみ日本詠、第29集は羽田・福島ともに台湾詠、第30・31・32・33・34集はともに日本詠と足並みが揃っている。第35・36集では羽田が日本詠のみに対し、福島は台湾詠を交えて出詠している。第37集は福島のみ日本詠、第38集では亡くなった羽

田の遺作の日本詠と、福島の本詠の句が載っている。あと第39集と第44集には福島のみが日本詠句を出詠している。

- 8) 羽田岳水「台北句会との交流開始に当り」『燕巢』1989年11月号。なおこの号には「燕巢 四百号／三十五周年記念交流 台北句会九月報」のタイトルで、台北俳句会員64人の句が2句ずつ載っている。季語は兼題(宿題)で出されたのか、「新涼」「赤まんま」「秋暑し」などが多く、台湾季語は見られない。
- 9) 「台湾一周の旅」『燕巢』1990年1月号、51-52頁。
- 10) 黄靈芝「台湾歳時記と台湾季語」『燕巢』1996年10月号。この文は「多少加筆」された上、『台北俳句集』第24集の「あとがき」となり、さらに『台湾俳句歳時記』の末尾にも収録されている。
- 11) この点については、黄靈芝自身が前掲「台湾歳時記と台湾季語」で指摘しているが、さらに拙論「植民地台湾における日本語俳句受容と課題——植民地期朝鮮俳壇と比較して——」『跨境 日本語文学研究』第三号(高麗大学校 GLOBAL 日本研究院、2016年6月)150-151頁を参照されたい。
- 12) 竹鷄てつけいは小綬鷄のこと。『台湾俳句歳時記』では主題季語「竹鷄」、副題季語「竹鷄」になっている。「ベエタウコッ」が「ベタコ」とされたのと同じ日本人の聴き訛りであろう。
- 13) 阿川燕城「台湾の季感」『燕巢』1988年6月号。
- 14) 第24集の「あとがき」138-148頁。
- 15) 同149-150頁。一部手入れ、省略。なおこれは連載の最初からではなく、1990年3月号の掲載分から実行されている。
- 16) 『台北俳句集』第24集「あとがき」。
- 17) 前掲岡崎郁子『黄靈芝物語——ある日文台湾作家の軌跡』64-66頁参照。
- 18) なお『台湾俳句歳時記』に引き継がれなかったのではないかとと思われる季題が十題ほどある。(54) 鹹魚キムヒョ、(76) たいわんあさがほ、(94) 瓜子クズ・筍乾チン、(121) 蛇、(136) 船釣スナフ、(138) ランタン祭、(149) 放風箏バンフンツン、(105) 猿の腰掛、(152) 磯釣サンギク、(174) 山薬、などである。このうち「たいわんあさがほ」は、『台湾俳句歳時記』の「205 野あさがほ」と思われる(「たいわんあさがほ」は205の副題季語にもないが、例句に「台湾朝顔」を詠んだ句がある)。「蛇」は「347 長い物」のことであろう。解説の冒頭に「蛇の噂をする時、《長い物》とよび《蛇》とはよばない」とある。「ランタン祭」は「026 放天燈」のことではないか。「猿の腰掛」は、「(2) 靈芝」が「234 靈芝」となり、副題季語に「さるのこしかけ」とあるので、2季題が統合された形である。残りの季題はどこかに隠れているのかもしれないが、ちょっと見当がつかない(括弧内の番号は「燕巢」連載時の番号、括弧のない番号は『台湾俳句歳時記』の番号である)。
- 19) 阿部誠文「黄靈芝《台湾歳時記》を読む(二)——その例句を鑑賞しつ

- つ」及び「同（四）」『燕巢』1999年2月号及び4月号。
- 20) 前掲阿部誠文「黄靈芝《台湾歳時記》を読む（四）——その例句を鑑賞しつつ」『燕巢』1999年4月号。
- 21) 石川清一「台湾歳時記の刊行を待つ」『燕巢』1998年7月号。
- 22) 前掲第24集「あとがき」151-152頁。初出『燕巢』1996年10月号。この文は『台湾俳句歳時記』にも更に加筆して転載されている。なお黄靈芝はここでは自分の句を例句にしないと言っているが、『台湾俳句歳時記』では季題ごとに必ず黄靈芝の句が取められている。これは後で見ると、「台湾歳時記」連載時の、黄靈芝の「作戦」だったと思われる。
- 23) なお王酔生の句は、「戦後台湾俳句小史（四）」で述べた『春燈』1985年8月号の当月集（五句欄）に入った句である。この句だけ季語が「媽祖春祭」となっているのは、「媽祖祭」では日本の俳壇で春の季語と認められないと思ったからであろう。その意味では記念すべき句である。
- 24) 陳錫恭がこだわったという、羽田に添削された黄靈芝の句は、手紙の日付からして、第一回「サシバ」の「群翔の差羽果てなく南指し」であろう。
- 25) 『台湾俳句歳時記』を見ると、台湾語（閩南語）の正題季語は220、副題季語は225あるのに、客家語の季語は正題・副題とも2語ずつしかない。いっぽう中国語（北京語）の正題季語は13しかないが、副題季語は105ある。さらに日本語は、正題季語161、副題季語502というように言語ごとの偏りが大きかった。李淑貞『黄靈芝文学之研究——以《台湾俳句歳時記》为中心』中国文化大学日本語文学研究所碩士論文、2006年、124頁、原文中文。
- 26) 『台湾俳句歳時記』には、『燕巢』に連載されたもの以外にかなりの追加がある。「人事」では「年画」「爆竹」「拜年」「博牌」「赤狗日」「接神」「アリツ祭」「マラリア」など、「自然・天然現象」では「九降風」、「自然・植物」では「苦藍盤」「桶柑」、「自然・動物」では「甘仔」「三斑」「瑠璃鳥」「虎峰蜂」「目白」「さはら」「黄鶯」「紅面鴨」などである。
- 27) この評は先に一部引用した、阿部誠文「黄靈芝『台湾歳時記』を読む（一）～（四）」『燕巢』1999年1月号～4月号である。
- 28) 黄靈芝がここで「S誌」に載っていた久保田万太郎の句の評を取り上げたということは、春燈俳句会を嫌いなながらも『春燈』誌は読んでいたということになる、当然、台北春燈句に参加していた台北俳句会員十数名の入選状況も承知していたと考えられる。
- 29) 第22集の「あとがき」も、『燕巢』ではないが、別の機会に書かれたものの転用である。第23集の「あとがき」は「一部加筆」と断っているが、これは『燕巢』掲載文の中間に挿入された個所のことで、末尾にはさらに原文よりずっと長い「補筆」部分がついている。このように『燕巢』へ寄稿した文を、『台北俳句集』に転載して「あとがき」としたりしているの

あるから、「あとがき」としては本末転倒に見える。ただし『燕巢』に掲載された黄霊芝の文は、『燕巢』のために書かれたものではなく、黄霊芝が台北俳句会の月例会会で配布する「ご参考まで」というプリントの文章を、羽田岳水が適当に選んで掲載していた場合が多いようである。このプリントは当時燕巢俳句会に参加していた台北俳句会員を通じて、毎月羽田のもとに届けられていたという。従って台北俳句会に縁のない文が「あとがき」になったわけではないといえるであろう。

- 30) 磯田一雄「戦後台湾俳句小史（二）」『成城文藝』第240号、(127) 366頁。
- 31) その後黄霊芝は『黄霊芝作品集21』として『論集 年々…月々…』（私家版、2008年12月）を出しているが、これは句会での個々の句評に加筆したもので、俳句観はうかがえるが、まとまった俳句論とは言えない。
- 32) 廖運藩「台湾川柳会初代会長頼天河さんのこと」、江畑哲男・台湾川柳会編『近くて近い台湾と日本 日台交流川柳句集』新葉館出版、2014年3月、26頁。